



昭和 29 年 4 月の洪水で米里一帯の低湿地は水浸しになった

逆川という名の由来と変遷

月寒川は西岡の国有林内（環境緑地保護地区）を源として、月寒・白石・北郷地区を流れ、米里地区で豊平川（右岸）に注ぐ一級河川である。支流にはラウネナイ川、望月寒川、米里幹線排水がある。

豊平川に合流する地点は、昔の地図を見て分かるように一面が低湿地である。札幌一帯に大雨が降ったり、雪解け水で豊平川が増水すると、水位の低い月寒川に逆流して、一帯が氾濫した。この逆流現象を見て、土地の人々は月寒川下流をいつしか「逆川」と呼ぶようになった。

治水対策として、次々の新旧地図の比較で分かるように J R 鉄道橋付近の蛇行を直線にして、その下流に新水路を掘削して豊平川下流に流した。それまでは今の旧月寒川・逆川を流れて豊平川に合流していた。

逆川流域の変遷

札幌郡白石村大字白石村字米里の開拓の歴史は、明治 23 年に 9 戸の開拓者が移住したことに始まった。

白石村の北部に位置して、望月寒・月寒・厚別・三里・野津幌の諸川が豊平

川に注ぐ場所で、低湿地と泥炭層が大部分を占めている。水が豊かな地形的条件を利用して早くから水稻栽培が行われ、明治 25 年には水田約 3 反歩の耕作に成功した。「米里」の由来もここにある。明治 27 年には逆川に米里水門を設けて用水路からさらに各所に用水を供給した。明治 45 年の豊平・白石・上白石・平岸四箇村聯合用水路設計平面図には、水路総里程 7 里 33 町 14 間（約 28 ㌧）と記されている。

岡田開墾は、明治 26 年に滋賀県からの移住者 50 戸に 116 町 7 反歩（約 116 ㌧）の土地を与え、生活必需品や農具など給し待遇したが、毎年の水害のため、ほとんど転居していった。大正の初めには徳島県出身者 2 戸が残るだけだった。

農場付近の交通は、豊平川堤防沿いの道だけで、春の雪解けや秋の大雨のときは豊平川と逆川の氾濫で人通りが絶えた。また、夏は人通り少なく、雑草が繁茂して、たまに人馬が通るだけだった。

明治 33 年には 44 町 3 反歩に石川・富山・福井・鳥取・香川・新潟県から 17 戸を呼び松田開墾として耕作した。大

増水した豊平川の水が 月寒川を逆流する「逆川」

さかさ
がわ

正の初期 1 年の収穫は米145石、大小豆20石、麦類850石、ナタネ 50 石を収穫した。札幌区と豊平川沿いにあり、交通便がよかった、と『北海道農場調査』(大正2年)に収録されている。

以後、時代が進み、札幌の発展とともに純農村から都市化への道を進み、昭和40年から順次区画整理が施行されていった。

特に道央自動車道の札幌ジャンクション周辺は流路の拠点として整備された。ここを挟んで広がる交通の便性の高い地区、この地区を含む周辺一帯は、道内物資の集積する流通拠点を形成している。

逆川治水の歩み

逆川は月寒川の新水路の通水までは月寒川の本流だった。この流域も泥炭層が堆積し、その厚さ6メートルに及んでいる。このため地盤は軟弱である。昭和30年後半から流域の都市化と度重なる水害により、豊平川支川の改修工事が促進されていった。

月寒川は昭和40年、望月寒川を昭和41年に本格的改修に着手し、昭和41年築堤に着工した。急速に進む都市化に対応するため、堤防工事に進捗に合わせ、低水路(川の水量が少ないときに川幅を規制するために一段低く仕切られた部分)、樋門(川の合流部に造られた水門)を新設した。また、豊平川合流地点付近には、河床の安定を維持するため、昭和41年床

止工(川床・護岸などの浸食を防ぐため川床をコンクリートで固める工事)を月寒川・望月寒川に各1基施工した。

流域の大部分が平坦で低地帯のため、川の長さの割に樋門の数も多く、軟弱地盤のため維持管理に苦労している。

都市化の対応策として、昭和49年に望月寒川に「月寒川排水機場」の建設に着工し、51年に完成した。これは昭和56年8月の洪水では、内水氾濫の被害軽減に大きく寄与した。

明治初期から治水事業によって河川の整備率は年々向上しているが、洪水

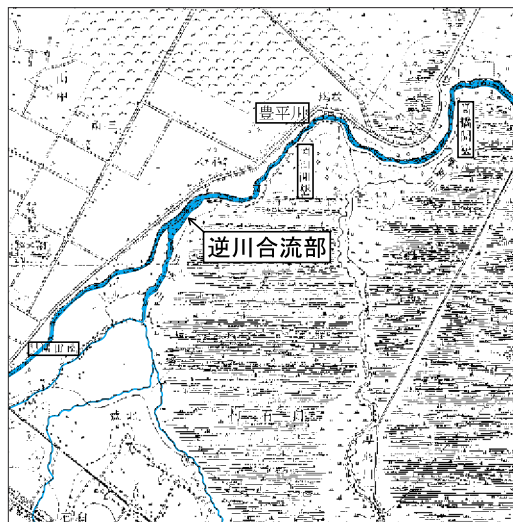
時に水災害を最小限度に防止するための備えが大切である。逆川の河川敷にはコンクリートブロックなどの防水資材の備蓄基地が昭和59年に設置されている。

現在の逆川は蓋をかけられ、その上は芝生や道路の下になっている。豊平川合流点の米里水門付近にわずかに昔の雰囲気をとどめている。

(南部 享)



左の写真と同じく昭和29年4月の洪水。東米里は海のようになった



切り替え前の逆川(明治44年地形図)



切り替え後の逆川(平成4年地形図)



大正時代の白石神社

入植の翌年、神社設置を願い出る

旧暦明治4年(1887)11月、仙台藩士族片倉小十郎の元家来たちが最月寒に入植し、懸命の努力で冬を越すための小屋掛けを終わらせた。場所は現在の国道12号の両側である。その努力を讃え、開拓使岩村判官は彼らのふるさとの名をとって白石村と命名した。

翌5年3月、白石村開拓使貫属取締助役・安斉謹吾、同・榊原次郎七、同取締・佐藤孝郷3人連署で、「入植して小屋掛けをして以来、今日まで開墾事業に励んできました。ついては、白石村の100間(180畝)四方の土地に神武天皇を祭る神社を建て、日々の鎮守とすることに意見がまとまりましたので、許可してください」と開拓使開墾役所に願い出た。

これに対し開拓使は「神武天皇を祭ることは認めないが、村内に祠を建て、札幌神社遙拝所として敬うならよい」と答えた。

白石村民らは、開拓使仮本庁(今の中央区北6条東1丁目)近くから円山公園に遷座した札幌神社の旧社殿を譲り受け、その月に白石村100番地(旧50番地)隣の予定地に移設して遙拝所ができた。

岩村判官は、旧伊達藩士らが逆賊の汚名を着せられたまま新天地に移住

し、天皇に忠誠を誓う姿にうたれ、お守りに持っていた畝傍山陵(神武天皇の陵墓)の砂を白石村守護産土神(守護神)として与え、開拓使属官(貫属)の高橋渉を別当(神寺を支配する職名)として派遣した。5年5月に鎮座祭を行い、以後この日を例祭日とした。

岩村判官の好意に感激した村民は、開拓使の指示による遙拝所としながらも、明治30年に晴れて白石神社と命名されるまで、村内では陰で「神武社」と呼んでいた。

白石神社には専任の神職がいなかったため、神事の心得があった杉山順が明治30年まであたった。開墾のかたわら善俗堂で教育にたずさわり、公立白石学校となった翌年の明治15年に学校を退職し、その後神官になっている。杉山順の死後、明治10年に幌別村から転入した阿部甚十郎が明治31年から勤め、畑は妻子に任せ、周辺地域の神社を回り、神事を行い、大正9年に没するまで勤めた。高邁な人格と立派な体格から多くの人に慕われた。

普段人の来ない村外れに神社を

白石神社を当時の白石村の最も奥に建てた理由は、古老座談会などで「入植時、1番地から神社のある50番地まで約3キロあった。村の集会などは善俗堂(白石小学校の前身)で行い、本府(札幌

入植の翌年、開拓の守り神として 白石神社をつくった



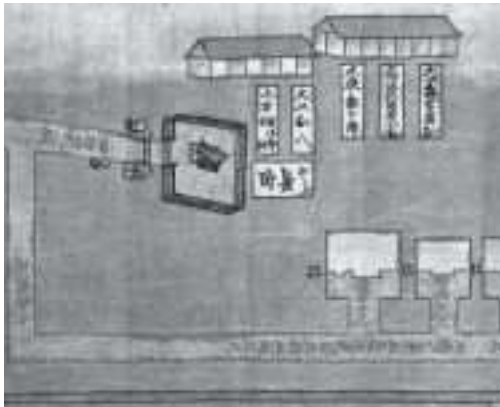
市街)へ出掛けることも多かったが、村の端の50番地を訪れることはほとんどなかった。そこで、年に1〜2回全村民が集う祭りが行われる神社は、一番不便な村外れに置くことにした」と語っている。

明治15年(1882)に社事代表の勝見直之は次の手紙を佐藤孝郷たちに送った。

「村の鎮守である神武天皇の社を建て、そのおかげで、お互いの家内安全、武運長久、開墾事業もうまくいき、いよいよ勤勉に励まれていることと思います。ついては、明治5年に建てた札幌神社遙拝所が大破し、建て替えに必要な額が10円以上にもなるため、皆さんにご寄付をお願いしたい」。

これに対し佐藤孝郷は、

「本社殿を修繕することはとてもよい



明治4年の札幌神社仮社殿

ことです。少額ですが1円を寄付しますので、費用の一部にしてください」

とのやりとりの手紙が残っている。

明治24年に懸案だった社殿改築を行い、明治30年(1897)9月10日、公式に念願の神武天皇を祭った「白石神社」が誕生した。9月11日を例大祭と定め、明治5年に決めた5月の祭と合わせて、春秋2回の祭が村民交流の場となった。しかし、明治32年(1904)に社殿を火事で失い、明治34年に再建された。大正9年(1920)には村社に昇格し、大正14年(1925)には社殿を改築



白石神社の大正時代の花見風景



昭和30年代の白石神社。下の道路は国道12号

した。社殿はこの後昭和41年にも火事で失い、翌年建て直して現在に至っている。

(塩見一釜)

墓地。土管の墓がユニーク

開拓使に内緒でつくった身近な



特徴的な土管型の墓。現在はこの一群だけになってしまった

近くに墓を

明治 4 年 (1871) に白石に入植した旧仙台藩片倉小十郎の家来たちの墓地として白石中央墓地が設置された。

現在の国道 12 号に沿った約 4[㍓]の入植地区間のうち、墓地が設置されたのは札幌側から 1.5[㍓]ほどの場所だった。現在の感覚では遠い距離ではないが、先祖との対話を大切にし、日常的に墓参りをした昔は、距離は重要な問題だった。

入植地の東側に住む人々からの強い要望で、白石村では明治 5 年に開拓使の開墾役所に次のように懇願している。

「48 番地屋敷裏に墓地を割り当てていただきましたが、100 戸に 1 カ所では不便です。もう 1 カ所 89 番地屋敷の裏に 50 間 (90 ㍓) 四方の土地がありますので、これも墓地に割り当てていただきたくお願いします」

しかし、開墾役所は「1 村に 1 カ所が決まりである」と請願を却下した。この墓地は許可のないまま開設されたため、正式な記録は残っていないが、明治 13 年ころと記した書類がある。正式に許可を受けたのは明治 35 年 (1902) 4 月だった。

ユニークな土管型の墓

開拓者の墓ではないが、この墓地でひととき人目を引くのは、大正期以降

に作られた土管型の焼き物の墓標である。戒名、死亡年月日などを粘土に彫り込み、上薬をかけて茶色く焼きあげたもので、今なお鮮やかな色つやを保っている。次第に普通の石材の墓に変わり、現存するのは野田荒吉が作った数個だけになった。

野田荒吉は愛知県から鈴木レンガ工場 (明治 17 年～大正 11 年) に瓦職人として来村した。今こそ瓦屋根は見られなくなったが、昭和初期までは一般住居の屋根にも広く使われた。

墓は当時も石山軟石 (凝灰岩) か木製の卒塔婆が一般的だったが、野田荒吉は瓦職人の特技を生かして焼き物で家族や知人の墓を作った。昔の職人は特技を生かして身の回りのものを何でも作ったが、墓さえも作ったのだ。

隣にキリスト教墓地

この墓地に接してキリスト教徒の墓地がある。昭和 7 年 (1932)、日本札幌教区天主教宣教師社団が、信者の埋葬地として本通墓地南側に土地を購入し、白石村に寄付し、キリスト教墓域として使用した。その後拡大されて今日に至っている。

(塚本謙蔵)





明治40年頃の津田^{りんご}苹果園

開拓使の東京官園から移植

ヨーロッパのリンゴが日本に入ってきたのは鎌倉時代だが、栽培が定着したのは明治に入ってからである。

明治4年(1871)9月、開拓使はケプロンのアイデアで東京に第一、第二、第三の官園(通称・東京官園)を設け、アメリカから輸入した果樹を青山南町の第一号官園に移植した。

明治6年10月、開拓使札幌本庁舎が完成し、90,816坪(約30.0ha)の広い敷地のうちの58,529坪(約19.3ha)が果樹園となり、明治7年から8年にかけて東京官園から梅・サクランボ・桃・スモモ・ナシ・アンズ・リンゴなど4,700株を移植した。

次いで開拓使は明治8年から20年までに無償・有償で671,600本の苗木を開拓者に配布した。

白石村にも明治8年から14年まで毎年果樹苗木が配布され、この7年間にナシ9,304本、ブドウ6,473本、リンゴ4,057本、モモ2,479本、スモモ1,085本、サクランボ920本、梅730本、アンズ426本、合計25,474本が配布されている。

リンゴだけをみると、明治8年387本、9年690本、10年727本、11年483本、12年600本、13年600本、14年570本

となっている。当時の白石村の人口は明治8年389人(98戸)、明治13年452人(98戸)と、この間変わっていないので、単純に平均すると毎年1戸あたり数本の配布ということになる。

明治8年に植えた苗が5年後に実をつけるものがあったが、その後に植えたものを含め、10,000本のうち実をつけなかったものが8,805本(88.05%)もあったと報告しているから、テスト栽培とはいえかなり厳しい結果だ。

津田^{りんご}苹果園が良質のリンゴを生産

津田教助は山口県出身で、明治14年(1881)に開拓使の官吏として札幌に来住した。15年開拓使の廃止に伴い札幌県に転任したが、同年末に退職して南1条西2丁目に聚文堂^{しゅうぶんどう}という書店を開き、店は繁盛したという。

津田は明治19年(1886)、白石村に4町歩の土地を購入し、リンゴの栽培を始めた。明治24年から果樹園の経営に専念し、園芸家として名を知られるようになった。

明治40年(1907)頃には3,500本・200町歩に達し、共進会などにリンゴを出品して、しばしば優賞を受けた。

郷土史「南郷」によれば、「明治21年4月、小澤治三八氏、札幌偕楽園より苗木20本を購入試作したるに始まる」の

開拓使が配布した苗から リンゴ栽培は白石一帯に広がった





地形図に果樹園の記号のある範囲（大正5年の5万分の1地形図）

記録がある。また、明治30年代に入ると「藤原慶太郎氏は、約6反歩を経営し、札幌市街に出荷し、部落林檎園の始祖なり」と書かれている。

札幌に北海道果樹協会を設立

明治20年頃から北海道の果物も販路が著しく拡張されて栽培熱が急に高まり、栽培面積も急増した。その栽培の中心は札幌区を主とする札幌近隣の町村だった。

明治24年(1891)10月、専門家や栽培者が集まって札幌に北海道果樹協会が設立された。全国で初めての果樹組合であり、会報の発行、講演会・品評会の開催、販路の調査などを行い、本道の果樹栽培に貢献した。

同協会は、明治25年11月、札幌で第1回果実品評会を開催した。これは全道で初めての果実品評会である。このときの一等賞の受賞者は次のとおりである。

リンゴ（1号）札幌村 橘 仁
 “（7号）南6西4 阿部隆明
 “（49号）山鼻村 水原寅蔵
 “（6号）北4西7 勸農協会
 “（7号）山鼻村 水原寅蔵
 ナシ 上手稲村 小島尚友

これを見ても当時のリンゴ栽培の中心地がわかる。明治27年に果樹生産に関する完全な統計調査が行われたが、札幌区及び札幌郡の果樹株数は全道の半分以上を占め、果実の生産では8割を超えている。そのうちでリンゴが全生産額の8割を占めている。

リンゴをロシアなどに輸出

北海道のリンゴの初輸出は、明治27年に函館港から清国（今の中華人民共和国）向けの67.8キログラムである。

輸出は年毎に増え、明治36年(1903)には1,108トン・120,388円と飛躍的に伸びた。これは全国のこの年のリンゴ輸出量の93.2%を占めていた。37年から38年の間は日露戦争の影響で大きく落ち込んだが39年には回復し、1,386トン・208,570円と、全国シェアの78.2%を占めた。道産リンゴの輸出先のほとんどがアジアのロシア領向けで、小樽港からウラジオストック港を経てハバロフスク、ハルビンなどへ送られた。

病害虫との戦い続く

こうして果樹栽培は需要の拡大に支えられ、数量・価格ともに著しく伸びた。明治30年以降、しばらくの間は北海道リンゴという名称で全国的な名声を得た。

しかし明治20年前後からカイガラムシ、ワタムシ、明治30年代にはシンクイムシ、ふらん病が広がり、リンゴ市場における評判は急落し、栽培者に多大な損失を与えた。こうして廃園するリンゴ園が続出した。

好況のうちに都市化が進む

昭和8年(1933)に、東札幌、白石中央、本通、南郷、大谷地、厚別のリンゴ栽培農家20数人が集まって白石果樹組合をつくり、相互に研究し合った。リンゴは販売価格が高く、畑や水田に比べ4倍にもなった。戦後の混迷の時期でも好況



昭和23年頃撮影の米軍航空写真では国道12号から旧横丁通にかけてリンゴ園が写っていた

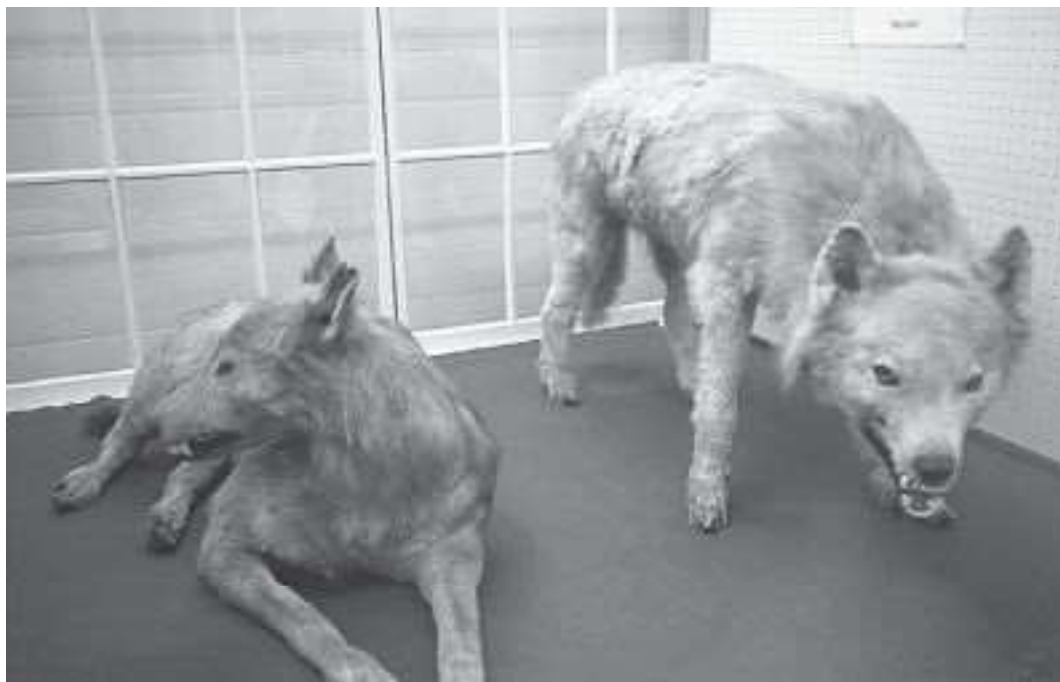
が続き、課税はきつかったがリンゴ農家は助かった。

昭和25年に白石村は札幌市と合併した。札幌市の発展はめざましく、白石も区画整理が行われ、急速に宅地化が進んだ。そしてリンゴ園も宅地化してリンゴ農家が少なくなったため、白石果樹組合も昭和35年に解散した。

（鈴木祥寛）

リンゴの開拓使番号と通称番号

品 種 名	開拓使番号	通称
赤龍（あかりゅう）	1号	1号
宝玉（ほうぎょく）	3号	赤3号
紅玉（こうぎょく）	21号	6号
紅紋（べにしほり）	30号	12号
緋之衣（ひのころも）	31号	19号
国光（こっこう）	34号	49号
倭錦（わにしき）	46号	阿部7号



安斉真睦さんが仕留めたエゾオオカミの雄（右）と豊平で仕留められた雌（左）

昼寝エゾオオカミの最後

開拓に入ってまだ日の浅い明治10年（1877）、（北海道大学附属植物園内博物館の説明板では12年8月）、武田清寧さんの妻が近くの義弟の家へ行くため横丁付近（現在の中央1条3丁目3番39号池田食品(株)付近）にさしかかったところ、寝ているエゾオオカミに出くわし、あわてて家に駆け戻った。

当時、道路といっても人が通れる程度の細道で、開拓された耕地を除くと大部分は原始林や湿地に覆われ、エゾシカやエゾオオカミ、熊などが出没する野生動物が主役の土地だった。

このエゾオオカミは近くの安斉真睦さんが間もなく武田清寧さん所有の火縄銃で苦心の末に撃ち取り、それから120年経った今も北大植物園の博物館に、世界でただ1頭の貴重なエゾオオカミの剥製標本として展示されている。また火縄銃は北海道開拓記念館に保存されている。

エドウィン・ダン^{（けいもの）}の話によると、エゾオオカミは手に負えない獣ではあるが、獲物がある限り、人に危害を加えることはなかったという。

冬は豊富なエゾシカを襲った。犬の3倍はある大きな足のおかげで、深い雪でも速く走ることができたので、エゾ

シカを確実に仕留めた。

エゾシカは群をなして無数にいた。肥えた土地は畑に変わり、そこに育つ作物はエゾシカにとっては魅力的だった。開拓者にとって害獣となったエゾシカは積極的に駆除され、次第に減っていった。さらに明治12年の記録的な大雪で餌の笹が大雪の下に埋まったために、道内各地で大量に餓死し、エゾシカは激減した。

エゾシカを主な餌にしていたエゾオオカミは餌がなくなったために飼われている馬を襲い、馬を生産する速度を上回ってむさぼり食った。

生産者はオオカミの害にたまりかねて猛毒のストリキニーネ^{（けいもの）}を買い集め、毒入りの肉の塊をあちこちに置いた。殺された馬にも毒をかけた。オオカミは生肉の誘惑に抵抗できず、ストリキニーネの臭気にもかかわらず、食べて次々と死んでいった。キツネ、カラス、野良犬もこの肉を食べて死んだが、当時としてはやむを得ないことだった。

こうしてエゾオオカミは明治22年ころまでには絶滅した。激減したエゾシカは保護の成果があがって次第に増えていった。

ヒグマ、エゾオオカミの恐怖と 闘って続けた開拓



諸世雑記に見る白石の熊の害

開拓者が最も恐れたのはヒグマだった。体型が大きく凶暴で雑食であることから、人や家畜はもとより農作物に及ぼす被害が非常に大きかった。明治10年に開拓使は熊・オオカミ1頭につき2円の捕獲奨励金を出して駆除に努めた。米60^キが2円50銭の頃だった。それでもこれらの猛獣に立ち向かう恐怖からか、実効があがらず、翌11年には熊5円、オオカミ7円に値上げしている。

白石村の熊の被害について、明治42年に開拓二世の榊原直行翁が書き残した「諸世雑記」に記されているので紹介してみたい。

明治5年、99番地（現在の平和通12丁目南・東白石会館付近）裏の湿地に穴ごもりから出た熊を佐々木直則、渋谷永貞の二人で射止めた。この熊は2^キ近い大熊だった。

明治8年7月7日朝、上白石との境の沼（現在の東高校付近）に母子グマが現れ、榊原直温、佐々木直則の2人で2頭とも殺し、20円の賞金を得た。

最悪のヒグマ事故

明治11年、かねてから軽川（今の手稲）に出没していたヒグマが馬を食い殺したとの申し出があり、さらに11月17日には円山村で炭焼小屋の屋根を壊したので、開拓使は猟師を集めて駆除することにした。白石から佐々木直則、武田義勝、榊原熊太郎の3人が参加して追跡を始めた。



北海道大学付属植物園博物館のヒグマの剥製。白石の熊同様に各地で人を殺して仕留められた

足跡を追い、藻岩山の中腹を経て豊平川を渡り、真駒内さらに月寒坂下の林まで追ったところで夜になり追跡を中止した。翌18日にはヒグマは白石村を通過し、夜に丘珠村に現れて暴れているため、再度佐々木直則、渋谷永貞、武田守約が出向いた。

12月5日の夜になって農家を襲い、主人と赤ん坊、下男を食い殺し、妻に重傷を負わせた。北海道の熊害史に残る有名な話である。琴似の屯田兵までが出動して射殺した。

北海道大学附属植物園の博物館に展示されているヒグマは、明治11年12月5日夜、丘珠村で炭焼小屋を襲い、3人を殺し、1人に重傷を負わせた人食い熊である。

明治13年10月13日朝、坂の上墓地（白石中央墓地）脇へ白石村民5人が熊討ちに出かけ、2人が先に子熊を討ったところ、母熊が暴れ出した。ある者は木に登り、ある者は筐の中に伏して難を避けたが、1人が逃げそこない、目の下から半面を取られ、そのうえ両足を踏まれ、首を食われて死亡した。午前10時頃、母熊を追いかけた岩瀬が帰らないため捜しに行ったところ、血の臭いはするが見あらず、そこへ安斉真陸、岡田庸理、武田清寧らが来、一同でようやく討ち取ることができた。

明治14年8月6日、93番地 渋谷永

貞宅の裏（今の南郷通10丁目南 旭町公園付近）に子連れ熊がいるのを見つけ、榊原直行、佐々木直則、渋谷永貞の3人で足跡をたどっていたところ、佐々木に熊が飛びかかったので、火縄銃を構えると、熊も驚いて筐の中に逃げ込み、カサとも音を立てずに逃げ去った。翌7日、村中総出で探したが見つからなかった。

東白石会館近くのヒグマ事故

かねて、80番地から92番地（現在の本通8丁目～10丁目北）裏の笹藪に居着き、トウモロコシを荒らす熊がいた。

明治29年9月2日、月寒道路（現在の水源池通）で佐々木直一がこの熊に出合い、討ち取ろうとしたが逆に頭・首にけがをして取り逃がしてしまった。直ちに入院させたが、翌日死亡した。

当日、99番地（現在の本通13丁目南・東白石会館付近）で村田守約が熊と格闘して入院した。村では札幌警察署の応援を求めるほか、アイヌの熊撃ち2人を雇い、村中総出で熊狩りをした。しかし工藤喜之助が目の下から顔面半分、鼻半分を欠く傷を負い入院した。翌4日に村中総出で空砲を撃ち、熊を追出し、立ち上がったところを撃ち取った。

（武田清晃）



大正10年頃の白石停車場

黒船渡来が炭鉱開発のきっかけ

徳川幕府は安政元年(1854)に日米和親条約を締結し、下田港と函館港を開港した。条約締結から1カ月後、5隻の黒船が函館に入港し、住民を驚かせた。これを機に外国船の入港が多くなったが、一様に船の燃料である石炭の補給を求めた。

当時北海道では石炭は採掘しておらず、幕府は元治元年(1864)岩内場所・茅沼炭鉱で採炭に着手した。しかし搬出と海上輸送で経費がかさみ、1年で廃止した。

函館奉行はイギリス人の鉱山技師E・H・Mガワーと機械技師G・スコットの二人を雇い、再び茅沼炭鉱の採掘を始めた。鉄道輸送によって搬出の効率化を図り、茅沼炭鉱がこの後百年続いた基礎を築いた。船舶の燃料などで石炭の需要は急速に伸び、開拓使にとって炭鉱経営は魅力的な仕事となっていた。そこで開拓使は新たに幌内炭鉱の開発を考えた。

明治5年に招いた地質学者B・S・ライマンが調査の結果、幌内には1億トンの埋蔵量があると推定した。

幌内鉄道の敷設で白石にも鉄道が

幌内炭鉱が操業を始めた明治11年

に、鉄道・道路・土木技術建設の指導者として、当時36歳の土木技術者J・U・クロフォードが着任した。

翌年2月、黒田長官はクロフォードに「幌内鉄道は石炭輸送が目的だから、構造は堅牢なものにし、将来全道に敷設される鉄道と連絡すべきものなので、その路線を決めるにあたっては十分に注意してほしい」と訓令したという。

石炭は船舶や製鉄所の燃料として安定供給が急務だった。鉄道敷設には室蘭ルートと小樽ルートを検討したが、小樽側から鉄道工事を始めれば資材輸送で有利なため、開拓使は鉄路を手宮～札幌～幌内と決定し、明治13年7月に工事を始めた。鉄道は同年11月に仮停車場に達した。わが国では3番目に敷設された鉄道である。工事費は約45万円だった。

幌内鉄道の車両はアメリカ製で、機関車2台、客車8両、台車17両、函車9両は帆船ジェラルド・C・ドベイ号で運ばれた。2台の機関車は当時のニューヨーク日本領事によって『弁慶』『義経』と命名された。

明治15年11月13日に運転を開始した鉄道に積み込んだ石炭が、翌日には手宮港に到着して関係者を感動させた。

白石駅は、幌内鉄道駅、定山溪鉄道の始発駅として活躍



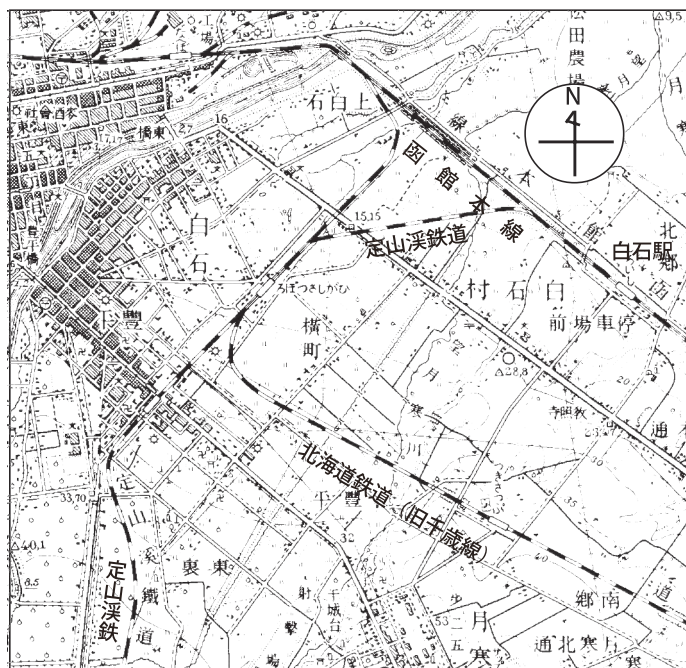
幌内鉄道は明治22年12月に北海道炭鉱鉄道が開拓使から払い下げを受けた。それまで冬期間運休していた札幌以東は通年運行を実施し、札幌・幌内間を2時間5分で結び、大幅なスピードアップが実現した。

白石フラグ・ステーション

札幌・幌内間の鉄道の間には江別、幌内太(今の三笠)に駅が設けられた。白石村には現在の駅の100㍍ほど厚別寄りに白石仮乗降場が設けられた。必要なきにフラグ(旗)を掲げて汽車を止め、客の乗降や貨物の荷下ろしをするのでフラグ・ステーションとも呼ば

幌内の輸送は、温泉客だけでなく、木材や鉱石の運搬にも必要なものだった。

財界人は定山溪鉄道を計画し、はじめは国鉄苗穂駅・定山溪間を考えたが、大正2年8月に豊平川左岸堤防が洪水で大決壊し、鉄道予定地が護岸工事



昭和10年発行5万分の1地形図。定山溪鉄道、北海道鉄道、函館本線が描かれている



札幌・幌内間を走った義経号

れた。

北郷最初の入植者である稲垣岩松が明治15年11月に乗車券の取り扱いを代行していたといわれる。白石からは特産のレンガと木炭が積み出されたが、明治16年に駅は廃止された。

明治36年4月1日に本格的な駅舎が建築され、白石駅が誕生した。この停車場の敷地は鈴木煉瓦製造場社長の鈴木豊三郎が提供し、人夫や資金面でも援助したという。

時が過ぎ、駅周辺には農協、小前コークス工場、朝日スレート工場、農産化学工場、製材場、煉瓦場などが操業していた。また、水田や畑が見渡す限り広がっていた。駅は物流基地として人や荷馬車の往来でにぎわった。

白石駅始発の定山溪鉄道を敷設

札幌の奥座敷と呼ばれる定山溪・札

のたために使えなくなり、国鉄との接点を白石駅に変更して敷設した。軌道と車両は国鉄払い下げの中古品を使い、大正7年10月17日から白石・定山溪間(29.9㍍)の鉄道営業を開始した。

昭和4年に札幌市電が豊平駅に乗り入れたために札幌市内の乗客はほとんど豊平駅から乗るようになった。

また、昭和6年に北海道鉄道(後の千歳線)の東札幌から苗穂までの区間を使って、苗穂駅始発、東札幌経由で

定山溪へ行けるようになったため、昭和16年2月に白石・東札幌間の旅客営業を廃止し、昭和20年3月に貨物営業も廃止した。

“春若葉、夏はせせらぎ、秋紅葉、冬は雪見に、いで湯の香り”(露香)などといわれ、農閑期には白石駅からの湯治客でにぎわったが、いつしか人々から忘れられた。

定山溪鉄道はその後20年以上にわたって定山溪に人を運び続けたが、自動車の普及で乗客が減り、昭和44年に廃止した。

(南部 享)



明治15年から16年まであった白石仮乗降場



白生公園にある開田碑が稲作の功績を伝え続けている

試作は失敗の連続

明治4年、仙台藩士族片倉小十郎元家臣たちが白石に入植した。米が作れない寒冷地とは知っていても米食への思いが断ち切れなかった。

明治7年に待望の種もみ2升(約3.5㍓)が開拓使から支給され、有志が植えてみたが実らず、以後支給は停止された。その後数年はこれに懲りて稲作を試みる人はなかった。

その後、毎年故郷の旧仙台藩白石領地から種もみを取り寄せては試作したり、明治10年ころには道南地方からあっせんされた種もみ、あるいは広島村の中山久蔵の開発した「赤毛」を分けてもらったりして作付けしていたが、気温が低いことごとく失敗した。

それでも試作は続き、白生公園にある開田碑の碑文によると明治14年に初めて成功したとされている。

明治14年(開田碑の碑文による。白石村史では16年)、白石村の望月寒川近くに入地した黒澤成教、安斉真睦、齊藤おうき応熙らが主となり、白石村33番地の武田実維の地続きの荒れ地1,770坪(58.5㍓)を利用して共有田を造り、16年に札幌県勸業課から譲り受けた香早生という種もみを試作したところ、もみ79俵(約5,500たんぼ㍓)を収穫した。

この共有田圃が現在の白生公園を取

り巻き、西は行啓通、南は白石中央3条通あたり、東は現在の変電所付近の中央6丁目、北は鉄道までの一帯である。

成功後も冷害に悩む

大きな収穫を得た明治16年の札幌付近は、イナゴの害と干ばつとで農作物は大被害を受けたが、谷地や沢地の水田は好成績だった。このようにして白石村も米作可能地として認められることになった。

翌17年には1町歩(約1しほ㍓)に拡張したが、この年は6月15日で最高気温9.9度、8月18日でも14.7度という低温のため、実りが不十分で種もみを得ることができなかった。

しかし、米に対する人々の執念は本能的でさえあった。くじけることなく毎年稲作を続け、23年(1890)には水田開発以来の豊作で1反歩(10しほ㍓)あたり平均1.7石、最高で3石(約180しほ㍓)の収穫があった。

共有田でリスクを回避

途中で脱落する者もあったが新規参入者もあって、共有地は鉄道の北、現在の北郷にまでも及び、1戸あたり間口10間、奥行400間(約1町3反・約1.3しほ㍓)、最終的には27戸、34しほ㍓にまで広がり、収穫も毎年増加し続けていった。

当時、寒地北海道は稲作不適とし麦を奨励した開拓使の方針にもかかわらず

米食への執念が、
寒冷地に不適な
米作を成功させた





白生公園。ここを囲んだ共有田で寒さのなかでの稲作が続けられた



昭和23年頃撮影の米軍航空写真では、白生公園付近一帯は水田地帯だった

ず、札幌付近で稲作を試みた人はかなりいたようだが、いずれも個人で、しかも小規模だった。

20 数戸が共同で水田経営を行ってリスクを和らげることが評判になり、札幌地方の水田経営の模範となった。その後道庁が今の札幌市立幌東中学校の向かい側に上白石村稲作試験場を造り、稲作の先駆者としての名声は確かなものとなっていった。

共有田として長期間続けられた理由は次の3点に集約される。

① 明治初期には、北海道のような寒冷地では稲作は“危険な作物”で、大規模に経営することは許されなかった。

② 当時の農業の主体はあくまでも畑作であり、稲作は余暇を利用しての試験的なものにすぎなかった。

③ この人たちは、旧仙台藩士として、団結心と信頼感が強かった。

なお、白石村の水田開発には、豊平外三村(平岸村、上白石村、白石村)の用水組合の功績も忘れられない。これは阿部仁太郎、佐藤珍平、菅野義実、大泉安定、砂金佐太郎、平塚直幹、日下茂次らの努力によって、明治27年9月に設立認可されたものである。

明治42年(1909)解散時に、この共有田は最後まで残った20戸に分割されたが、最も狭い土地で田圃1枚(10坪・33平方 m)が数戸あった。この狭小地は土地が肥沃なため苗代田に利用されていた。

また白生公園の南100 m に用水門があったが、これは結成された用水組合によるもので、精進川から導入された水を70 $\%$ 、望月寒川からの水を30 $\%$ 使用していた。

(塩見一釜)



製造されたレンガは本州にも送られた

白石沿線で褐色の粘土がとれた

開拓使の札幌での原土調査は明治5年と12年に行われ、最も土質がよいのが幌向青土、次が江別赤土と鑑定されていたが、幌向の粘土は白っぽいという理由で積極的に採用されなかった。

札幌の煉瓦場のはじまりは、札幌蒲川通（今の中央区東2丁目通り）の工藤宇三郎の工場で、明治10年（1877）に開拓使工業局に11,000個のレンガを納入している。

明治15年に幌内鉄道が開通した当時、うっそうとした白石沿線の森林の表土を剥ぐと、割合浅いところからレンガに適した褐色の粘土が出てきた。白石レンガの始まりは15年に駒沢小平が粘土を発見してからで、16年に遠藤清五郎の遠藤煉瓦場が2万個製造したという記録がある。以後いくつものレンガ工場が設立されたが、いずれも短命だった。

増産で燃料の薪を切り尽くし、 ドイツ製石炭窯に転換

鈴木佐兵衛は東京都で生まれ、鈴木式レンガ焼窯の発明で知られたが、事業に失敗して北海道に渡り、明治17年（1884）札幌郡白石村北郷（今の白石区平和通6丁目）に鈴木煉瓦製造場を建

設し、北海道における本格的レンガ製造業の先駆けとなった。

掘った粘土はモッコで馬車に運び、さらに工場に運んだ。十分に練り、足で型に押し込んで密度を高め、天日で乾燥させた。登り窯で焼き上がるまでに3、4日かかったが、1回で数万個のレンガができた。レンガを焼く燃料は付近の樹木だったが、まきの入手が難しくなった大正13年ころにはドイツ式石炭窯に切り替えた。

開拓者のよい働き場所

鈴木煉瓦製造場は開拓に入った人々のかっこうの稼ぎ場所となり、農作業で生計が成り立つまで、ここで「出面取り」をすることが唯一の現金収入だったという。男1日20～30銭、馬車を持っていたとしても1円にもならなかったが、家計は大いに助かった。

職人たちはレンガ工場の敷地内の長屋に住んでいた。作ったレンガは農家の馬車で運び出した。レンガは10個1束にし、それを積むのも農家の主婦の出面だった。

職人の服装は印ばんでんに股引き姿、毎年6月の札幌祭には「鈴木煉瓦製造場」と染め抜いた法被を着ていた。

佐兵衛は幌内鉄道との間に明治17年にはレンガ18万個、翌年には2倍以上

鉄道沿線に良質の粘土。レンガは道庁、ビール工場、東京駅などに使われた



の45万個の納入契約を結んだ。明治19年には月寒分工場^{かわら}で瓦の生産にも着手し、それらの製品は鉄道工事や北海道庁赤レンガ庁舎、帝国製麻会社、ビール会社第二工場、東京駅、植物園内の博物館、トンネルの内壁、鉄橋の橋脚部などに使われた。また師範学校や第二十五連隊の屋根瓦などを作り、カメや土管なども製造し札幌の街づくりに大きく貢献した。

レンガからコンクリートの時代へ

佐兵衛の没後、まだ20歳だった子息の豊三郎（明治2年生まれ）は製品の改良に努め、各地に分工場を設置、札幌レンガ界のリーダーとして活躍し、事業のかたわら第1期・第5期の白石村村会議員を務め公共事業に熱心なことで人望を集め、大正9年に没した。

明治22年に幌内鉄道と炭鉱を経営することになった北海道炭鉱鉄道株式会社は、鉄道を岩見沢―室蘭、追分―夕張、岩見沢―砂川、砂川―空知太と延長し、鈴木レンガ工場も増産を続けた。

明治33年（1900）耐寒屋根瓦を工夫して工字型熨斗瓦の名で特許を得、また樺太民生署の囑託としてペチカの改良にも貢献した。

同じ頃、白石村、隣の月寒村、豊平村にもレンガ工場が誕生し、ついには鉄道を経営する北炭自らが明治31年（1898）に野幌煉化工場を開設し、6基の登り窯の煙突が煙を立て始めた。これによって個人経営レンガ産業は終焉の方向へ向かい、さらにセメントの出現、鉄筋コンクリートの普及は完全にレンガの生命を断った。大正11年（1922）鈴木レンガ工場は閉鎖した。

（塩見一釜）



昭和23年頃米軍撮影の航空写真に見る鈴木煉瓦製造場跡。粘土は採取場から馬でトロッコ2、3台を引き、土練場まで運んだ。閉鎖後経営者が替わり、昭和26年頃までレンガの製造が行われていた。



鈴木煉瓦製造場の干場^{かんば}（明治19年）



邸内には菊亭侯爵が植えた黒松が今も残っている

開拓の志に燃え北海道へ

旧華族（清華家）菊亭脩季は安政4年(1857)に京都で貴族の子として生まれ、遷都とともに東京へ移住した。

かねてから北海道開拓の志に燃えていたので、北海道で活躍していた伯父の三条實美のいる北海道に渡り、明治12年(1879)3月に開拓使勸業課に勤務した。明治15年に開拓使が廃止され、その後は農商務省札幌勸業育種場詰、続いて明治16年3月に北海道農業管理局事務取扱となり、同年7月札幌農業事務所副長となって農業振興に努力した。

今も残る数本の黒松

明治17年(1884)に27歳で侯爵を授けられた。明治19年5月に退職して、9月に上白石村で農園の経営を始めた。翌明治20年に月寒村の畑地9万8,877歩（約33^弐畧）の払い下げを受けている。

右ページの新聞によれば『東京府華族、当時上白石村寄留』となっている。しかし、この月寒村の払下土地墾成について明治20年以降年次別墾成面積に関する計画書を提出しているが墾成面積はない。

その後、明治22年12月、三条實美、蜂須賀茂韶、戸田康泰などと協同で雨竜原野1億5,000万歩（約5万^弐畧）の貸し

下げを受け、華族組合農場（雨竜農場）の経営を始めた。この頃に上白石寄留地を離れたようだ。そのため、上白石に住んだのは札幌農事事務所退職後の明治19年から雨竜農場を始めた明治22年までの短い期間だったと思われる。現在は当時の建物は残っていないが、本州から取り寄せて植えた黒松のうち、樹齢百数十年を経た数本が庭に残っている。

菊水の名の由来となる

上白石を去った後、明治24年三条實美公の死去に伴って雨竜農場は解体、菊亭脩季は深川、雨竜未開地6,000町歩余（約6,000^弐畧）の貸与を受け、菊亭農場を開いたが、これもやがて返納したり、小作人に売却、譲渡するなどして、負債処理のために全地を処分している。

その後中央政界で活躍したが、明治38年(1905)10月に46歳の若さで東京で亡くなった。

侯爵の死後、長子の公長が跡を継いで農場内の邸宅に住んだが、実際には東京、京都に滞在することが多かったようだ。そのため、道内各地に所有していた農地など約6万^弐畧を売って、代わりの土地を京都付近に買った。

北海道開拓を夢見た菊亭侯爵の「菊」と豊平川の「水」から菊水誕生

きくすい





菊亭脩季

売却された土地は区画整理 されて宅地に分譲

上白石の農場については、大正15年に北海道炭坑汽船株式会社(略称北炭)が住宅地組合を結成して、1坪(3.3平方尺)2円で一括買収し、住宅地組合は翌年昭和2年ただちに区画整理にとりかかった。札幌初の区画整理はその2年前の北炭の桑園土地組合だから、この組合は札幌で2番目の土地区画整理組合ということになる。

組合は札幌から分譲地へ直行する上白石橋を昭和5年に豊平川に架けた。分譲地は1区画500平方尺ほどで、3.3平方尺あたり4円、250宅地が分譲された。

買ったのはほとんど北炭の社員で、退職後に住むつもりで、それまでは菊亭侯爵時代の小作人たちに農地として貸していた。しかし、終戦後に農地解放が行われ、250戸のほとんどが不在地主とされて耕作していた人に解放することになってしまった。

なお、札幌市と合併後の昭和29年(1954)、菊亭侯爵が上白石村に寄留した地域であることにちなみ、菊亭の「菊」と豊平川の「水」から地名は「菊水」と改称された。

(塚本謙蔵)

昭和23年頃米軍撮影の航空写真に見る菊亭侯爵邸。当時は蛇行した豊平川がすぐそばにあった

七十八百八千壹曆西
(休定日曜月)

北海道毎日新聞

第九拾六號

發

〇地下土地整理成調 (承前)

札幌郡月寒村 札幌區南一條住平民商
一五万四千二百四拾三歩 畑地 新田織之助
内 五千四百二拾四歩 樹林地
四万八千八百拾九歩 未墾地

二十年申丑成
二十一年全上
二十二年全上
二十三年全上
二十四年全上
二十五年全上
二十六年全上

〇島尾尾崎、雨宮官の建築技と題し去月廿九日の毎日新聞に記する所を見るに曰く雨宮官、近日各々元老院へ一篇の建議技を出されしことは讀者の知る所なるが

札幌郡月寒村 一五万八千八百七拾七歩
内 三千歩
四千五百歩
六千歩
七千五百歩
九千歩
一万二千歩
一万二千歩
一万二千歩
二万〇八百七拾七歩

二十年申丑成
二十一年全上
二十二年全上
二十三年全上
二十四年全上
二十五年全上
二十六年全上
二十七年全上
二十八年全上
二十九年全上

(未完)

菊亭侯爵が月寒村の土地の払い下げを受けたことを報じた明治20年11月6日発行の北海道毎日新聞(現在の北海道新聞の前身)の記事





藩の廃止で北海道に移民

吉田善太郎は文久元年（1861）に陸奥国南岩手郡上田村に生まれた。吉田家は代々南部藩に仕える藩士だったが、明治維新で藩が廃止されたため職がなくなり、生活が非常に苦しかった。

北海道開拓使の移民募集に応じて一家は岩手を離れ、明治4年(1871)4月7日に札幌に着いた。善太郎は10歳だった。札幌郡月寒村東10番(今の月寒中央通7丁目・月寒公民館付近)に住み、父は木炭製造業を営んだ。

畑を広げ自作農を育てる

明治14年11月、善太郎は20歳で父を失い、家業を継いだ。その時の財産は、わずかに家屋1棟、土地2.5町歩(約2.5[㌧]㌧)、馬5頭だった。

その後必死に働き、月寒や二里塚(今の北野)などで農業をあきらめた人々の土地を譲り受け、明治20年には開拓使から大谷地の土地23万余坪(約77%※)の貸し下げを受けた。

当時の大谷地低地は一面のアシ原の湿地帯で、丘陵地にはカシワやナラの大木が茂っていた。所有地は現在の豊平の福住、月寒東から北野、清田、さらには大谷地（現在の下白石バス停あたり）まで広がり、水田は70町歩、畑地は60町歩、小作人は30数戸にもなった。

さらに、独立心のある小作人には土地を譲って多くの自作農を育てた。

灌漑用水を造り水田が発展

明治21年4月(1888・27歳)、永住の地となった大谷地に移り住んだ。今の栄通18丁目で、池に面した2階建ての大きな家だった。

明治24年ころに月寒村厚別（今の清田）の住民が利用する道路用地を提供し、また、2万円をかけて、後に「吉田用水」あるいは「善太郎用水」と呼ばれた灌漑用水路を作った。この水路は国道36号の旧道に架かる厚別橋あしりべつの下流300メートルの地点を基点とし、現在の清田区清田1条1丁目（コカ・コーラボトリング裏手）から、大谷地小学校東側を直進、函館本線を横断するもので、機械力のない時代で、幅4メートル、深さ2メートル、延長6キロメートルの水路を、地主・小作人40～50人がスコップ・島田鍬くわを使い、4カ月で完成させた。

この用水路完成で米づくりが盛んになり、200畝以上もの水田ができ、この地域は北海道の稲作の発展に大きな役割を果たした。また、この大事業を後世に伝えるため、大正8年(1919)10月に基点の場所に「吉田用水記念碑」が建立された。

時代変わり水田から宅地へ

用水は水利組合で管理されてきたが、

灌漑用水路を造り、北海道の
稲作に貢献した吉田善太郎





昭和 23 年頃米軍撮影の航空写真で見る吉田用水。用水路は黒線で示したが、すべてが吉田用水かどうかは分からない



吉田善太郎

昭和 40 年代に入ると北野地区の宅地化が急速に進み、この水利組合は昭和 48 年(1973)10 月、水田農家^{やそしま}八十島勝義が離農したことで働きを終えた。

子息をアメリカ留学させ
酪農にも力

また善太郎は明治 30 年(1897・36 歳)、

薪炭用にしていた大谷地や月寒の丘陵地を切り開いて牧場にし、乳牛の品種改良に尽くした。息子の善助をアメリカへ留学させ、明治末期には牛 20 頭を一度に輸入し、記念としてモダンな洋式の家を建設したが、この建物は八紘学園に栗林記念館として保存されている。大正 5 年に 56 歳で白石の家で亡くなった善太郎の遺志を継いだ子息は白老町で社台ファームを経営し、全国的な牧畜企業として成長している。

善太郎が所有していた通称「吉田山」の名は、善太郎と親しい間柄にあった

連隊長が軍用地寄付などのお礼の意味で当時の地形図作成の陸軍参謀本部に上申し、5 万分の 1 地形図に記載されていたが、住宅地になるとともに地形図から消えた。しかし東月寒地区と北野地区の間を流れる吉田川は現在も住宅地の中を流れ、吉田の名をとどめている。

(塩見一釜)